

テーマ：2017年10-12月期GDP予測（最終版）  
 ～前期比年率+1.0%を予想～

発表日：2018年2月8日（木）

第一生命経済研究所 経済調査部  
 主席エコノミスト 新家 義貴  
 TEL:03-5221-4528

## 2017年10-12月期GDP予測

2017年10-12月期の実質GDP成長率（2月14日公表予定）を前期比年率+1.0%（前期比+0.2%）と予測する。1月31日の段階で前期比年率+0.8%（前期比+0.2%）と予想していたが、その後公表された経済指標の結果を反映し、予測値を若干上方修正する。

本日公表された12月分の国際収支統計では、筆者の想定よりも財、サービスとも輸出金額が上振れており、輸出の予測値を前期比+2.2%（従来予測値：同+1.8%）に上方修正した。輸入の予測値も前期比+2.4%（従来予測値：同+2.3%）と若干上方修正しているが、輸出の上振れの方が大きく、外需寄与度の予測値は前期比年率▲0.2%Ptと、従来予測値から0.1%Ptの上方修正となっている。なお、2月6日に公表された12月分の家計消費状況調査の結果なども反映させたが、個人消費等、その他の需要項目の予測値に変更はなかった。

10-12月期の成長率は、7-9月期の+2.5%から鈍化するとみられる。もっとも、7-9月期は在庫の上振れと輸入の減少によって成長率が押し上げられていた面があったが、10-12月期は逆に、在庫のマイナス寄与と輸入増が成長率押し下げ要因として働く見込みである。7-9月期と10-12月期は均してみた方が良く、7-9月期の高成長の後にもかかわらず潜在成長率並みの伸びを確保できるということであれば、特段の問題はないだろう。実際、在庫と輸入以外の需要項目では、輸出の高い伸びが続き、設備投資も明確な増加傾向で推移するとみられるなど、企業部門主導の景気回復という状況は変わっていない。また、GDP以外の経済指標においても足元で好調な推移を続けているものが多く、景気の変調をきたしている様子は窺えない。10-12月期の成長率の鈍化はあくまで一時的なものとみられ、景気は着実な改善傾向を続けていると判断してかまわない。

その他、今回の実質GDP成長率以外で注目されそうなものとしては、GDPデフレーターがある。7-9月期には前年比+0.1%と5四半期ぶりにプラスに転じ、デフレ脱却宣言とのからみで注目されたが、10-12月期には前年比▲0.1%と、小幅ながら再びマイナスになると予想する。原油価格上昇等の影響により、控除項目である輸入金額が上振れることが、GDPデフレーターの下押しに繋がる見込みだ。

（需要項目ごとの予測値の詳細と解説は、Economic Indicators「2017年10-12月期GDP予測」（1月31日発行）をご参照ください）

		(%)
実質GDP		0.2
	(前期比年率)	1.0
内需寄与度		0.3
外需寄与度		▲ 0.1
民間最終消費支出		0.4
民間住宅		▲ 2.6
民間企業設備		1.2
民間在庫変動(寄与度)		▲ 0.1
政府最終消費支出		0.3
公的固定資本形成		▲ 0.5
財貨・サービスの輸出		2.2
財貨・サービスの輸入		2.4
名目GDP		0.0
	(前期比年率)	0.0

※断りの無い場合、前期比(%)  
 (出所)内閣府「国民経済計算」、第一生命経済研究所